

ゆとりの研究

西村 暹

万有製薬株式会社 つくば研究所名誉所長



つくばサイエンス・アカデミーは異分野交流、知的触発を大きな目的としているが、若手研究者は自分の研究に忙しく、なかなかそんなゆとりはないと言う。私も以前は、研究は土曜も日曜もない、世界の競争者は夜も昼もなく頑張っているなどとも思っていたが、企業の研究所に来たこともあり、また歳とったせいか意見が変わってきた。

それで9月20日に行われた「サイエンス・フロンティア つくば2002」(SFT2002-宇宙)にも出席してみた。毛利衛、井口洋夫、合志陽一、M・メイヤー各先生の講演は、大変有意義であった。この縁もあって、井口先生にはNASDAでセミナーをさせていただく機会を頂き、その際広大なキャンパスや施設を見学させてもらった。つくばに来て10年以上経って初めて、こんなものがあったのかと驚くと共に、実際に宇宙に飛び立つ日本のスペースステーションを見ることができたのは感激であった。聞くところによると、NASDAには年間6万人の一般見学者が来るという。無料だとのことなので、ぜひ皆さんも見学に行かれることをお勧めする。

最近、学士院会報(2001-Ⅲ、No.832)に掲載された團伊玖磨氏の遺稿「創るということ」を読む機会があり、大変感銘した。4月20日に神田学士会館で講演された内容で、5月17日に中国で亡くなられた。真に残念なことであるが、これを読んで驚きだったことは、彼は作曲家であると共に、音楽のみならず、芸術全般に造詣が深く、特に東洋の音楽や明治初期の日本の音楽の歴史的発展をよく勉強されていたことである。このようなバックグラウンドが彼の音楽の芸術性、独創性の背景にあったのだと痛感した次第である。

得てして日本人は専門馬鹿に陥りやすいと言われる。以前国立がんセンターにいた時に、当時のソ連邦のモス

クワの分子生物研究所からポストドクが来ていたが、彼がインテリであることに驚かされた。勿論トルストイなどロシア文学にも詳しく、またnaturalistでモスクワに帰るときは、こっそり私の家の庭にいた青蛙を数匹持ち帰った程である。これに比べて一般的に日本の若手の研究者は話題が少ない。来日した外国の研究者と会食をしても、そのような席では研究の話はできないし、ややもすると黙りがちになってしまう。現在活躍している年輩の先生方には、意外と子供の頃に蝶や甲虫を集めるのに凝った人が多い。好奇心や子供心は、幅広い視野と共に、良い研究をするための必要条件のような気がする。ちなみに江崎先生のお宅にはたくさんの模型電車のコレクションがある。

どうやって若い人をつくばサイエンス・アカデミーに引きつけるか? その手だてはなかなか難しい。馬を水辺に連れていっても、水を飲むかどうかは馬が決めることである。

● にしむら・すすむ ●

1960年、東京大学化学系大学院生物化学博士課程修了。理学博士。財団法人癌研究会癌研究所研究員、ロックフェラー財団給費研究員として米国オークリッジ国立研究所生物学部に留学。米国ウィスコンシン州立大学酵素研究所研究員を経て、1965年、国立がんセンター研究所に勤務。ウイルス部分子遺伝研究室長、生物学部長、生物物理部長等を歴任。1992年より万有製薬つくば研究所に。常務取締役、専務取締役を経て、2000年より現職。American Academy of Arts and Sciences 外国人名誉会員、日本化学会名誉会員等、役職多数。つくばサイエンス・アカデミー理事、事業推進アドバイザー。